

だという筆者の主張は新鮮である。教育社会学は、この原点にもっと注目すべきである。今日の教育が存在論の地平を問題視せざるをえない状況にあるという認識から、本書で探究する社会学的人間学の考察法は、教育社会学のリストラに重要な示唆を与えてくれると信ずる。

最後に、筆者にこれから期待したい点は、一貫した理論展開であるが早急な展開をのぞんで機能論の傾斜を避けたい。受苦性の問題、生と社会構造の連関など、またディルタイの生の哲学の「存在

規定の問題」、そしてO・F・ボルノーの「個別諸現象の人間学的解釈の原理」の問題も考えたい。

本書から教育社会学の考察法の反省は重要である。それがやがて「教育の社会学的人間学」また、「人間学的教育社会学」の考察へと導かれるのではないかと私は密かな期待をもっていることをつけ加えておきたい。

◆四六判 224頁, 1850円
世界思想社

■ 書 評 ■

久富善之 著

『競争の教育—なぜ受験競争はかくも激化するのか—』*

久富善之 編著

『調査で読む学校と子ども』**

静岡大学 深谷昌志

◆ 日本の進学事情

日本の進学事情を外国の研究者に理解させるのは容易ではない。高校受験を例にすれば、結果としてはほぼ全員が入学できる定員が保証されている上に、どの高校に進学しても学習を進めるのにそれほど開きは認められない。したがって、学習塾や予備校に通い、夜遅くまで勉強しなくとも、進学は保証されている状況下にある。さらに大学進学についていえば、進学率が4割に迫って、もはや「大学卒」が将来の社会的な達成を保証するとはいえなくなった。進学したところで、それほどメリットがないことは誰でも知っている。そうした意味では受験競争の激しい割に目的がはっきりしな

い「競争」のように思える。

つきつめていうなら、多くの者が競争に敗れ挫折感を味わっている一方で、競争の勝利者になったところで勝利のもたらすものは努力に比して少ない。いわば、勝利者無き競争、あるいは、幻のゴールをめざした意味の少ない争いである。子どもや親は一流の良い学歴は人生を送るための最高のパスポートと信じて一本心は信じきっていないのであろうが、信じこもうとして一競争に参加しているが、競争が成立している土台そのものが喪失しかけているのである。したがって、親たちが学歴の効用を冷静になってとらえ直し、子どもの塾通いをやめさせれば、進学競争は一気に鎮静しよ

う。土地は必ず上がるという土地神話がバブルがはじけて崩れさったように、少子化の流れの中で学歴競争のバブルもいずれ消滅するというのは楽観的すぎるのであろうか。しかし、10年後を考えるとかなりの確率で全体としての進学競争が鎮静化するように思う。

◆ 「閉じられた競争」の概念

久富善之氏の『競争の教育』は第三者には意味が少ないかに見えるが当事者は真剣に－というより、時には狂気のように－取り組んでいるそうした「(受験)競争」のメカニズムを解明しようとしている。ともすると、受験そのものに目が集中しがちだけに、そうしたメカニズムを焦点に据えて分析を試みようとする姿勢に研究者としてのセンスの良さを感じる。

そこで問題となるのは久富氏がどういう論理で競争のメカニズムを解明するかであろう。同氏はまず、進学競争の歴史的な流れに着目する。そして第2次大戦後の受験状況を、①「抑圧された競争」、②「開かれた競争」、③「閉じられた競争」の三つの時期に分類している(同書22頁)。

第一の時期は1959年頃までで、経済的・文化的な抑制要因が作用して進学が抑制されていた時期に当たる。しかし、経済的な繁栄につれて、いくつかの進学抑止要因が取り除かれ、進学が社会の諸階層に「開かれ」、60年代から70年代前半までの第二期にはいる。第三期は1975年頃からで、進学先が頭打ちとなり閉鎖的な状況が深まるにつれて、競争の中で「優者」と「劣者」との格差が拡大し

「格差拡大・固定化」が進む。

この「閉じられた競争」は、①競争参加者が相互に敵対化、②競争に勝つことが大事という競争の価値の肥大化、③序列化された競争の正当化などの状況をもたらすという(同書72頁)。

そして、こうした変化を背景にして、いくつかの問題状況が生まれてくる。一例をあげるなら、競争が激しくなると「後の効用が不明確でも、その競争で獲得が難しいことそれ自身が一つの価値になる」という「上下方向拡大効果」(同書74頁)が生まれる。たしかに、現在の受験競争を見ていると将来の達成をそれほど信じているわけではないが、競争を降りるのも心配なので、競争のための競争をしている印象を受ける。そうした状況に対する久富氏の指摘は鋭く、説得力を持つ。

さらに、皮肉なことに「競争が空前の規模で激化することを通して、教育上の序列は社会における人間評価の正統的序列にまでのし上がった」(同書166頁)の指摘もなされている。

そうなると、学歴の効用に疑心を抱きながらも、全国的な渦に巻き込まれる形で競争が激化する。しかも、激化すればするほど、皮肉なことに競争の値打ちが上がり、さらに競争の激しさが増す。その結果、競争が競争を呼んで、歯止めがきかなくなる。

久富氏は現在の受験をこのように「閉じられた競争」と性格づけた上で、学業成績が子どもに与える影響や進学競争の渦に巻き込まれる家庭の状況などを考察している。中でも、成績の中以下の生徒

の自我が上位層の生徒より閉ざされ、学校が不安の場になっている結果は興味深い。

なお、同氏編著の『調査で読む学校と子ども』（草土文化）にはデータに基づいた話し合いが掲載されており問題の理解を深めるのに役立つ。特に、教育社会学関係者はデータに慣れ、独りよがりの結論を書きがちなので、データの解釈に当たり、こうした形で現場の教師の声を聞く機会をもうけることも重要であろう。しかし、論じられている内容は前者と同一なので、ここではコメントは割愛したい。

◆ 今後の課題

すでにふれたように、本書は「(受験)競争」のメカニズムを解明しようとしている。そして、解明に成功しているように思う。それだけに、ふれられていない部分を考えてみたくなる。もちろん、本書は200頁前後の本で、この本にすべての期待を託すのは無理というものであろう。したがって、これからの指摘は久富氏というより、受験や進学に関心を持つものが手分けをして研究を重ねる課題なのかもしれない。

本書では子どもと受験との関連に多くのスペースが割かれている。その割にそうした子どもたちの生活への言及が少ない。例えば、受験生活とテレビやマンガ、テレビゲームとの関係がどうなっているか。また、塾通いと友だちとのつきあい、成績と部活との関連、生活の乱れが食生活にどういう影響を与えるのかなどふれて欲しい領域が少なくない。子どもの自由時間が塾通いによって失われて

いる実態などもくりかえし明らかにして欲しい問題であろう。

子どもを学習者としてではなく、ひとりの生活者としてとらえ、そうした生活の中に学習を位置づける。特に学業に自信を持ってない子がどういう生活を送っているのかに言及があれば、「競争」が生活の深い部分にまで傷跡を残しているのが明らかになったと思う。

また、冒頭にふれたように、国際比較的な視野にたつと日本の受験に特色が見られる。現在でも、イギリスやフランスでは高学歴を望む階層に限られ、久富氏のいう「抑圧された競争」下にある。また、韓国などでは競争そのものは激しいが全体として抑圧感がなく「開かれた競争」の印象がする。そのほか、北欧を尋ねた時、進学にそれほど大きな価値を置かず、それなりの無理をしない生活を送ろうとしている青年たちに出会った。ニュージーランドやオーストラリアの青年も競争している者もいるが、全体としては自分なりのゴールを定めてのんびりとハイティーンらしく暮らしていた。さらに、アメリカの場合、きびしい競争なのは確かだが、きびしさが個別化され、少なくとも「閉ざされた競争」という感じではない。

そう考えてみると、進学競争に社会によっていくつかのパターンがあり、その中に日本の「競争」を関連させる。それと同時に日本の「競争」が成立している基盤を押さえておくことが大事になる。

小さな島国の上はかなり同質の文化を共有する人たちが同一の言語を使って生活している。しかも、何故か意欲的な人